

27年度版教科書つれづれ 26  
「スーホの白い馬」(光村図書・小学2年)の巻

加藤 郁夫(読み研事務局長)

はじめに構造表を示す。

○冒頭	中国の北の方、……
○発端	ある日のことでした。……
○山場のはじまり	そのぼんのことです。……
◎―― 最高潮	「そんなになさしないでください。それより、わたしのほねやかわや、すじや毛をつかって、がっきを作ってください。そうすれば、わたしは、いつまでもあなたのそばにいられますから。」
○結末	……これが馬頭琴です。
○終わり	……一日のつかれをわすれるのでした。

これは、教材研究の定説化シリーズ30巻の『「スーホの白い馬」の読み方指導』の構造よみとも一致する。

「スーホの白い馬」の構造自体は、教師間でもそれほどゆれを生じないといつてもよいかもしれない。ただ、この作品は二年生の終わりに位置し、二年生で学習する最後の物語教材である。教科書で14ページもあり、子どもたちからすれば小学校に入って学習する一番長い物語といえる。そして、物語のはじめでは次のように述べられている。

このモンゴルに、馬頭琴というがっきがあります。がっきのいちばん上が、馬の頭の形をしているので、馬頭琴というのです。いったい、どうして、こういうがっきができたのでしょうか。それには、こんな話があるのです。

この作品は馬頭琴の由来を語る話なのである。言い換えれば、馬頭琴の由来がどのようなものであったかを、子どもたちが読みとれることが第一のねらいになる。かなり長い話でもあるので、その事件展開を子どもたちがきちんとつかめるように指導していくことが必要だ。

発端は、「ある日のことでした。」からであるが、「むかし、モンゴルの草原に、スーホという、まずしいひつじかいの少年がいました。」からとする意見が出てくる可能性がある。先に引用した説明から、具体的な話の中に入っていくところで、お話が始まる感じがするところである。ただ、ここでは、スーホの紹介がされるだけであり、事件はまだはじまっていない。

「ある日のことでした。……」から何か起こったことが示され、それがスーホが白い馬を拾ってきたことだとわかる。「ある日」という表現は『スイミー』でも出てきており、何か起こった日だからこのような表現になることをあらためて確認しておきたい。題名にもあるように、スーホが白い馬と出会うところが、事件のはじまりである。そして事件は、スーホと白い馬の関わりで展開していく。以下、スーホと白い馬の関係がどう展開していくのかを読み取っていけばよい。この作品

は、両者の関係の展開が読み取りやすいように語られている。それは時間を表す表現への着目である。

「あるばんのこと」……白馬がおおかみからひつじを守ったこと

「ある年の春」……けい馬大会に出て、一頭になったため、反対にとのさまに白馬を取り上げられてしまったこと。

「そこで、ある日のこと」……白馬がとのさまのところから、逃げ出したこと。

「そのばんのこと」……スーホの家に白馬が逃げて帰ってくるが、次の日に死んでしまうこと。

「あるばん」……スーホが白馬の夢を見ること。

二年生では、発端を見つけた後、すぐにクライマックスを探すのは少し難しいかもしれない。話が長いだけに、話の展開をきちんと追えない子どもが出てきてしまう。それだけに、上記のように時間の表現に目をつけながら、そこで何があったかを一つずつおさえていって、みんながお話の展開を理解できるようにしていくのである。

その上で、このお話のクライマックスはどこかを考える。候補としては、二つの場面が出てくると予想できる。「そのばんのこと」のできごとか、「あるばん」のところである。

「そのばん」は、矢が何本もつきささった白馬がスーホのもとに帰ってくるという点ではドラマチックな場面である。ましてや、白馬は死んでしまう。スーホにとって大事な存在であった白馬との永遠の別れである。緊張感も高く、クライマックスにふさわしいようにみえる。

ただ、クライマックスを考えることは、作品全体の事件の流れを俯瞰することでもある。この話が、馬頭琴の由来を語るものであることを、最初に述べていたことをもう一度振り返って確認させたい。スーホと白馬との別れでは、馬頭琴の由来にならないのである。そしてもう一つ、この話はスーホと白馬の別れで終わる話なのかという点である。白馬がおおかみからひつじを守ったところでスーホは次のように語りかけている。

「よくやってくれたね、白馬。本当にありがとう。これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。」

とのさまのもとから白馬が逃げ帰ったのは、スーホのこの言葉にこたえたものとも読むことができる。そうすると、最後はスーホと白馬が別れ別れになった話ではなく、その後の夢の中での白馬の言葉こそが、白馬のスーホに対する答えとなっているとわかってくる。白馬の死を乗り越えて、スーホと白馬がいっしょにすることが実現されるのがここである。そして二人がいっしょにすることで、馬頭琴の由来ともなる。

白馬が「いつまでもあなた（スーホ）のそばにいられ」ることで、スーホと白馬がいっしょになる、それがはっきりとする夢の場面がクライマックスにふさわしいといえる。

さてここまで教材研究について述べてきたのは、23年度版（以下旧版）と27年度版（以下新版）の学習の手引きについて考えるためである。

旧版は「読んだお話を紹介しよう」とある。そして、「人物がしたことやできごとを中心に、お話をみじかくまとめたものを、あらすじといいます。」として、あらすじをまとめることを中心にして、その上で紹介者は「何をつたえたいか」「外すことのできないだいじなところ」を考えて、家の人に話してみようとなっている。

それに対し新版は、「お話を、そうぞうしながら読もう」とあり、手引きの課題が変わっている。

そこでは「お話のじゅんに、じんぶつのしたことや言ったことをたしかめましょう。そのとき、そうしたり言ったりしたわけを考えましょう。」とあり、以下のように場面を分けている。

- ・「スーホ」と「白馬」との出会い
- ・ひつじをおおかみからまもる「白馬」
- ・「白馬」を「とのさま」にとり上げられた「スーホ」
- ・「とのさま」のところからにげ出す「白馬」
- ・「スーホ」のところに帰ってきた「白馬」
- ・馬頭琴を作る「スーホ」

この手引きの課題に対して、どう答えるのか少し考えてみよう。

〈ひつじをおおかみからまもる「白馬」〉の場合、「じんぶつのしたことや言ったこと」は、スーホが白馬の体をなでながら「これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。」と言った、「そのわけ」は白馬をととても大事に思ったから、とでもすればよいのだろうか。

〈「白馬」を「とのさま」にとり上げられた「スーホ」〉では、「じんぶつのしたことや言ったこと」はどうまとめればよいのだろうか。この場面ではスーホはけい馬大会に参加して一頭になったにも関わらず、とのさまの理不尽な扱いで白馬をとり上げられてしまう。スーホは被害者であり、「そのわけ」を問われても困ってしまうのではないか。

〈「スーホ」のところに帰ってきた「白馬」〉では、ここはスーホの側から考えるところであろう。「スーホ」のところに帰ってきた「白馬」という表現は、白馬の視点から考えるように指示しているように読める。

これらからの明らかなように、「お話のじゅんに、じんぶつのしたことや言ったことをたしかめましょう。そのとき、そうしたり言ったりしたわけを考えましょう。」が、この話をまとめるための的確な課題になっていないのである。

旧版では、「あらすじ」をまとめることを、次のようにやや大雑把に指示していた。

- ・だれが出てきますか。
- ・だれが、いつ、どこで、何をしましたか。
- ・どんなできごとがありましたか。
- ・どのようにおわりましたか。

それを新版では、丁寧に「あらすじ」をつかませた上で、人物の心情をも考えさせようと変わったのではないかと推測できるのだが、わかりやすくまとめられるような問いかけになっていないのである。

先に示したように、時間を表す表現に着目してまとめていく方が、子どもたちにとってはるかにわかりやすいのではないかと思う。

もう一つ、新版では次のような課題もある。

### 自分の考えをもとう

「スーホ」は「白馬」が帰ってくるまで、どんな気もちだったと思いますか。

白馬をとのさまにとり上げられた後に、次のようなところがある。

白馬をとられたかなしみは、どうしてもきえません。白馬はどうしているだろうと、スーホは、そればかり考えていました。

「自分の考えをもとう」なのだから、本文に根拠を持ちながら、子どもたちが一人ひとり考えていく課題であるはずである。しかし上記の表現に基づいて、子どもたちが多様に「自分の考え」を持てるとは私には思えない。確かに指導要領に自分の考えをまとめるという課題はあるが、それはこのような箇所での課題ではないではないだろう。安易に「自分の考え」をもつよりも、まずは作品の表現をきちんと読ませることを大事にしたい。